

## ○カカラの考察 (津山 尙)

Takasi TUYAMA: On the vernacular name of *Smilax China*.

サルトリイバラにはサルカケイバラ、サルカケイゲなど類似の方言が諸國にあるが、ヒメカカラの名で植物學者の間で注意されている所のカカラ系統の方言もまた諸所に残っている。この系統は九州、中國地方に多く小野蘭山も本草綱目啓蒙に「カタラ、石州」と記している。壹岐と名護屋の中間にある加唐島(カカラシマ)もこの植物に關係があるらしいことは前川文夫博士から教えられたことがある。小生の郷里廣島市の内外でも、カタラ、カタロウ、タカラなどの名が中年以上の人々の間で廣く行われている。五月の節句の頃、餅菓子屋でカシワ餅と稱して餡入團子の上下をサルトリイバラの葉で挟んだものが一般に賣り出される。同地ではカシワの葉が多くは得難い事情にあるからであり、サルトリイバラそのものもしくはカシワと呼ばれる。

所が、新潟縣東頸城郡松之山村附近ではオオイワカガミをカタラッコと呼んでいる。新潟縣天童誌にもこの名が記されているが、地域が明示されていない所を見ると、この名はもつと廣い範圍に残っているものであろう。松之山村ではカタクリをカタッコ、ホタルをホテラッコなどと言うことから想像するとカタラッコはカタラの變形であるに違いない。サルトリイバラとオオイワカガミの両者は共に適當な大きさのつややかな圓く固い葉を有し、food wrapper として或は代用食器として適當であると考えられるので、九州、中國地方のカカラ系統の方言が北陸に入つてオオイワカガミに乗り移つたことは極く自然のなりゆきと考えられる。木の葉をこの様に利用することは古くは極く普通であつたと考えられるから、カカラがこれに關連した名ではないかと疑うことも理由のないことではあるまい。以下は想像に過ぎないが、カカラの古形はカタラであり、糧葉(カテハ)ではあるまいか。kateha が katara になつた蓋然性は、手がタマクラ(手枕)、タジカラ(手力)、目がマナコ(目子)、マナザシ(眼差)、マブタ(目蓋)、木がコノハ(木葉)、酒がサカグラ(酒倉)、などの例で判るように e→a の變化が日本語の中に多いことで説明される。

なお、サルトリイバラの別系統の方言、ガンダチバラ、カラタチバラ、ガンドチイバラなどは從來の説のようにカラタチ(唐橘)に結びつけるよりも、神(カン)に結びつけて考えられないこともない。神館(カンダチ)などを持ちだすのは早計に過るかも知れない。(白石の東雅、飲食部には「麴カムダチ」なる語が載せてあるが、もしサルトリイバラとの關係を強いて探せば醱酵操作中の覆い葉としての用法が想像される。)しかし、一時代前の食品調整型式が、次代には祭祀と結びつくことは一般に見られることである。例えば餅や團子のような食品が現代生活の中でいかなる方面に強い生命を保っているかを見れば明かである。したがつて餅や團子が漸く日常の食品ではなくなり、神に結びつけられ始めた時代にサルトリイバラの葉が神に關係した呼び名を得たとしても不

思議ではない。カテ(糧, 粮)をカチ(搗)に語源的に結びつけることは不可能かも知れない。しかし、搗布(カヂメ)、搗栗(カチグリ)などはカタクリ(カタカゴ)などを通じてカタラとタ行四段活用動詞の derivative として一脈のつながりを感じる。完成前の上代語においては、言葉は現在より一層自由に變通し得たであろうとは広く認められていることである。

上記をまとめるに際して小川由一氏の「高野山の植物」(昭和 15 年)の「サルトリイバラ」の章を参照すべきであつた。氏は多くの方言例を挙げながら曰く、「この驚くべき多数の方言名の懷には皆夫々何等かの習俗が宿されていることを思ふと此の植物と土俗との親しみの深いことが察するに餘あるのであろう。ククワラとは随分角ばつた發音であるが、此の系統の名稱は薩摩から九州の西海岸を経て裏日本の西部へかけて分布しているやうで、薩摩、肥後、壹岐等のククワラ又はククワライゲ(イゲは棘のこと)、石見や出雲のカタラ等皆之に屬する。九州東岸の豊後ではクワンクワラといひ、安藝の一部でカタラグイというさうであるが、之等も亦勿論ククワラ系統の方言である。」また、この植物の葉で包んだ餅を紀州でイビツ、オサスリ等といいこれは同時に植物自體の名でもあり、いずれが先に命名されたものか今ではもう判らないといひ、紀州ではこの植物をマンジュウノハ、カシワ等と呼ぶ地方もある由。マンジュバの方言は「秋田縣の或地方」にもあるという。小川氏の所説中、小生に關心のある所は以上の様であるが、これらの記述もまた團子や餅との關係の深いことを示す。啓蒙中の方言に「ゴキイバラ能州」とあるのは勿論御器茨であつて代用食器としてのこの葉の歴史を語つている。

## ○ 清澄山にはナガサキシグモドキも産する (倉田 悟)

Satoru KURATA: *Dryopteris Toyamae* Tagawa, new to Honshū  
(Mt. Kiyosumi, Pref. Chiba).

千葉縣清澄山にオオミツデ一名ナガサキシグ (*Dryopteris Sieboldii* O. Kuntze) が自生する事はかなり古くから判明していたが、これと近縁なるナガサキシグモドキ (*D. Toyamae* Tagawa) も産する事が明らかとなつた。即ち東大農學部林學科植物學教室に藏されるところの鈴木治太郎氏が 1928 年に採集された實葉一枚の腊葉は田川氏の原記載に良く適合する。尤も側羽片は三對のみであるが、この點を重視する必要は無いと考える。オオミツデも清澄山には稀な羊齒であるが、林内所々に産する如く、上總側の一小谷には現在數十株が旺盛な生育を示す所もある。ナガサキシグモドキは更に少いものと思われる。後者は從來九州と臺灣にその産を知られていた(上野の國立科學博物館には、田代善太郎先生が既に古く明治 45 年に、肥前西彼杵郡岩屋村にて採集された腊葉一枚がある)が、遠く房總半島迄分布が及んでいる譯であり、その間の各地、特に從來判明せるオオミツデの産地には期待出来るし、又、生育地に於けるオオミツデとの形態的に生態的比較検討も必要であらう。